

## 宇津保物語登場人物論拾遺

原 田 芳 起

## 一 は し が き

宇津保物語は、源氏物語と同様、世代にして実に四代にわたる長篇物語である。したがって、これも源氏物語と同じく、登場人物の数がきわめて多く、人物相互の關係の設定も複雑である。系譜的な關係が煩雜である上に、それを讀者に理解させるための用意が十分でなかつたきらいがある。その点は、源氏物語に遠く及ばないこと、改めて申すまでもなからう。説明はされているのだが、讀者にはよくわからない、楽屋おちに終つていゝものがあつても、結果として認めざるを得ない。だが、この点について、この物語にあまりに多くを求めることが無理であらう。この物語の失敗が、源氏物語作者に教訓となつた点もあつたにちがいない。

たとえば、藤原の君の巻で、左大将源正頼の家の繁栄を語りたいために、十四人の女の子、十二人の男の子、それに七人の婿たちを、総まくりに登場させ、以後この複雑な大家族關係が折に触れて物語面に出て来る。しかもみならず、九の君あて宮に對するおびただし数の懸想人たちがつぎつぎ登場し、しかも平行的に活躍し、それらの家族關係まで出て来るのだから、讀者の記憶への負担は大へんなものになる。これは讀者にとつて負担であるだけでなく、作者の創作活動にとつても少なからぬ束縛となつたであらう。説明不足はその結果としてまぬがれない所もあつた。

一般の讀者は、わからない所を努力してまで考へてみることもなかつたが、この作品を古典として研究しよう

とし始めた後世の学者たちは、われわれもそうであるように、何とか自分たちの手を加えてでも理解しなければならなかった。多くの誤解がこの時に生まれたのは、これも当然の事でもあった。

理解の困難がまず多くの誤写を生じた。それを改訂して原態に返そうとして推定がはたらくのは当然だが、作業が性急であれば、誤った改訂が生じる。甲の箇所における改訂本文がこの箇所の本文と衝突し矛盾すると、乙の箇所も改められる。乙の箇所の本文は正しかったかも知れない。さらに、丙丁と改訂が施されてゆくこともある。この種の改訂が集積して、全篇にわたる。それで全篇にわたつて合理化されるかという、決してそうはゆかないものである。より大きな矛盾があらにもこちらにも生じて拾収がつかないものになる。われわれがこれまで活字を通して読んで来た宇津保物語の本文は、このようなものであった。

近世の校本以前の写本（以下便宜上旧来の写本もしくは旧本と記すことにする）には、誤写が多くてとてもそのままでは読めないが、物語内容の矛盾や衝突はむしろ少なかった。あれば、原作自体の成立に関係させて説明できるものであった。

これらの、誤解による本文損壊の中で、一番厄介なのが、作中人物をめぐる説明や描写に関する詞章におけるものである。それは全篇の構成に直接関係するからであり、かつ誤解が連鎖反応的に転移してゆくからである。その例を一つあげてみよう。

蔵開の中の巻で、右大将兼雅が、一条邸に住む旧妻妾たちを説明する詞章があるが、細井貞雄の「玉琴」などで、旧本の原形を留めなくなる程に改訂して、われわれはこの改訂に従つて読んでいたのだが、旧本と改訂本文と比較してどちらが矛盾が少ないか。旧本の本文の一部をまず宮内庁書陵部桂宮本によつて記して、最低限の誤写の訂正を右傍に小さく添えておく。これを玉琴が本文とした所と比べてみることにする。

① たちばなの所はちかげのおとぎのみいもうと也。それはとしはわれにこよなくこのかみにぞおはせしおやにする。にしわたりにはかういなどいますかり。そのかういは、さい将の中将のみめ、みこのは、也。むめつばの宮す所といひし、いみじかりし色ごのみなりしを、かたらひたりしぞ。 (35 ウラゝ36 オモテ) (古典文庫一)

## 宇津保物語登場人物論拾遺

## 一三二頁

実は、これで何ら矛盾する所はないのである。この引用の部分は昔の右大臣橘千蔭のいもうとと、その近親者らしい梅壺の更衣との二人について言っている。更衣は千蔭のおとどの娘かも知れない。忠こそ法師と昔愛情を持ちあつていた事があるが、同族でもあつたのだろうか。「おやにする」五文字は、何の誤写かはつきりした見当はつかない。「玉琴」の「その」としてゐるのは、内容としては穩当であるが、誤写のプロセスを考えにくい。「をや」を上につける助詞と見てそこで切り、「する」を「そが」の誤写と見る事もできる。「おはする」の誤写で下にかかるかとも。更衣と宰相中将との關係は、中将の妻（嵯峨院の皇女）の母であるとか解釈すべきである。この内親王と中将との間には宮はたと呼ばれる男の子がいる。中将は左大將源正頼の三郎、名は祐澄、祐澄が内親王に冷たいという事が世間の話題になつていて、嵯峨院も心配していらせられる。物語におけるこの設定はかなり重要なもので、内親王の結婚のむずかしさという事が問題として提起されてゐるのである。源氏物語にも同様の問題提起をしたらしいストーリーのいくつかがあり、問題小説の先驅とも見得るものであるから、この人物設定は重大な意味を持つ。

さて、右の部分を玉琴はどう処理してゐるかを見ると、①は大体同じだが、「也」は削られ、②は一句全部この位置から除いて下の方に移される。③④の部分も原形を留めないほどの改作がなされてゐる。つないで見ると、次のように全く内容を異にした本文になる。

たちはなの所はちがげのおとどのいもうとと、みこばらなり。うめつぼのみやす所とぞいひし、いみじき色このみなりしをかたらひとりしなり。それは年はわれにこよなくこのかみにぞおはせし。そのにしわたりには故かういのいますめり。そのかういは、宰相中将のみむすめなりしが、びはなん上手におはせし。それにちごひとり出もうでたりしが、いかにおひ出しにやあらん。

(イ)(ロ)(ハ)はすべて作爲的にはめこまれたものである。これでは千蔭のおとどの妹が(ロ)梅壺の御息所で、兼雅よりはるかに年上で(イ)母は皇女であり、それとは別に更衣であつた女性があつて、それは(ハ)宰相中将の娘であ

り、(ハ)琵琶の名手であり、右大将兼雅と結ばれて(ハ)子が一人あるということになる。「故かうい」とあるのは、「もとの更衣」とすべきところを用字法を誤つたものである。

この玉琴の本文には数多くの矛盾がある。梅壺の御息所を更衣と別人とする設定にも無理がある。梅壺の御息所が嵯峨院に仕えたことは忠こそ巻に見え、忠こそと近親関係があるらしいことや、二人の間に単なる好意にはとどまらない程度の愛情が持たれていたことが知られる。一方、宰相中将源祐澄の妻が皇女であつたことは、沖つ白波の巻末の絵詞に「北の方は源氏、年二十三、子二人」とある所で初めて語られ、蔵開中巻で祐澄の子宮はたが登場する所で、夫妻の間がらがやくわしく紹介される。絵詞の「源氏」という記載は厳密なものではなかつたのか、子を「宮はた」と呼んでいる点からは、皇女の身分を保つていた事が知られる。さて祐澄の妻が嵯峨院の皇女であることは蔵開中巻に朱雀院が述懐して、「そがうちにも宮(太后)の御愛子なり。などみこたちかくのみあらん。女三の宮(兼雅室)もいとあはれにものせらるなり。祐澄の朝臣も(妻なるみこを)いかゞしなさんとものすらん。すべて女みこたちはたゞにものせられんこそよからめ。身によからぬ宮たち多く持たるや」(6才)(二〇七)と言われた所からも明らかである。

そこでこれらの同じ巻に出て来る「宰相中将」を祐澄以外の人物とすることは乱暴な解釈としなければならぬ。宰相中将の御娘が更衣であつて、しかも今は兼雅の妻の一人となつていてということとは不可能である。

さらに大きな矛盾は、一条に住むものと更衣が琵琶の名手であるという設定である。兼雅の妻妾たちの中で、琵琶の名手であり、心賢い女で、やがて三条に迎えられて仲忠母とも仲むつまじくなると物語られるのは、昔源宰相と呼ばれた人の娘で、若いうちに兼雅に托された女性で、一条殿では西の一の対に住んでいたのである。この人に一人の男の子があつて、兄の仲忠にも愛される人気者となるのである。この源宰相の娘と更衣を混同して作文してしまつたにせ物であると考えざるほかはない。

このような無理な改作がどこから生じたか。これは明らかに、蔵開下の文章の読みあやまりから出ており、これとつじつまを合わせたものである。女三の宮や、式部卿の宮の中の君が三条殿に迎え取られたので、万一の望



## 宇津保物語登場人物論拾遺

みも絶たれた女たちは、それぞれのゆかりに頼つて分散する。

かういはいはさい将<sup>(相)</sup>の中將のわたくしのとのに、御むすめむかへたてまつり給<sup>(②)</sup>て、にしの一<sup>(③)</sup>のたいにおはするは、さい將ばかりの人の御むすめ、わかくてたてまつりたるなりけり、それはせうとなよ<sup>(なる)</sup>てありければむかへつ。(38丁) (二三八)

①②が別人であることは、物語の前後に照らせば明らかである。①は「更衣は宰相中將の私の殿に、中將の北の方である内親王が迎え申した」というのである。これを「御娘を迎えて」と解釈したために、前に引いた「更衣は宰相中將の御娘なりしが」という改作本文となつたのである。

さらに「宰相中將の私の殿に御娘を迎え」と解したので「西の一の対におはする」を、「中將邸の西の一の対に更衣が住む」と続けて意味を取つた。そこで更衣と西の一の対の君とが一人にされてしまつたのである。「宰相ばかりの人の御娘」が重複もし矛盾もする事、「せうとなる人ありて迎へつ」が全く意味をなさなくなつてゐる事は、いづれも放置されている。琵琶と子の事は楼の上上巻に西の対の君の事として語られている所で、その男の子を見た仲忠の口から間接的に、

あやしきことかな。にしのたいの君をこそ「ちごありしをたゞひとめみずてをば君<sup>(む)</sup>なむかなしうしてとりこめてし」とのたまひしにやあらん。(3) (一六七五)

と語られ、そのち仲忠が重ねて訪問した時にこの子が琵琶を上手に弾くという事でこれも間接に母君が名手である事が語られる。玉琴の本文の改作者が、この対の君と更衣を同一人物にしようとして作爲していることが知られよう。

この対の君と更衣が同一人物でなど絶対にありえないことは、兼雅と対の君が結ばれた事情を追想する兼雅の発言を注意すればわかる。

むかしあはれぐあんさい將<sup>(源 宰 相)</sup>の、「ゆくすゑやむごとなき人おはすとも、なをこれ心ぐるしう見たまへ、らさ<sup>(は)</sup>らん、心ぼそくものはかなきさまにてちりはべらんは、いとかなしかるべくなむ」と、「かたちはよにもよ<sup>(えき)</sup>らさ

にいとおほくはべらん、こゝろに・はみにくませたまはじ」といひしものを……」(5ウウ) (一六八二)

対の君は年少の時分にその父源宰相が兼雅に托したのであり、宮仕への経歴などあるべくもない。更衣については、蔵開下の巻に、

ゐんにさぶらひしを、<sup>(8)</sup>いてまかでにしぞかし、あないと<sup>(ほ)</sup>おし。(39オモテ) (一二二九)

とある、嵯峨院の更衣であつたのを、兼雅がいわば強引に迎え取つたという形である。それがあわれたと兼雅は思う。宰相の君については故源宰相の遺托に十分こたえていなかった事を心ぐるしく思うのである。この二つの影像を一つに重ねる事は不可能である。

このあたりに平安朝物語文章の表現の不明確さも責められるかも知れない。それは今言つてもしかたのない事であらう。解釈から本文批判への道のむずかしさを自戒自重する事が必要であらう。

私は以前に「宇津保物語の中の人物―藤原の君の子女をめぐる」という小論を、国語国文学才三十二卷十一号に発表し、また「宇津保物語の中の人物―嵯峨院およびその周辺」と題して、樟蔭国文学才三号に発表した。本稿では前稿前々稿に残された分野で、この物語に登場する人物をめぐる解釈上に疑義や問題のあるものを拾つてゆくことにする。(注二)

なぜこのように、宇津保物語が特に、人物関係の理解に混乱をおこしたのかという点を、ついでに一考しておきたい。この物語が必要以上に人物を羅列する傾向があり、主題に統一されない末端的な興味がつつ走りがちなことにはわざわいされているのではないかと思う。色好み兼雅をめぐる女たちに話が及ぶと、その一人一人について同じようなウエイトをかけて説明しないと気がすまない。遠近法的な物語技巧が不足している。あて宮をめぐる求婚競争を書き始めると、やたらに多くの人物が登場する。その一人一人にそれぞれ境遇があり、家族関係があるのは当然だが、そのいずれをも省く事ができない。一往はすべて説明しようとする。つまり、統一した主題への結構が弱くて、やたらに小主題に分裂する傾向が強い。むやみに多くの人物が羅列される。作者は計算して書いていても、読者にはとてもおぼえきれない。要するに世相物語的興味が独走して、全篇の主題へのしぼりが

## 宇津保物語登場人物論拾遺

不足している。そのあたりに原因があるであろう。

とは言うものの、注意して読んでみると、作者の不注意による錯誤は案外多くはない。かなり知的に計算して、系譜的關係を設定して書いているようである。それにもかかわらず、従来作られている人物系図で成功していると思われるものはほとんどない。一部は物語そのものの罪でもあろうが、多くは研究者側の読みの不足にもとづくものである。

## 二 右大臣藤原兼雅をめぐる人物系譜

俊蔭の巻に、時の太政大臣の四郎でわか子君と呼ばれる少年として登場した兼雅は、俊蔭女とはかない一夜の契を結ぶのであるが、藤原氏であるかどうかはまだ書かれていなかった。藤原の君の巻で、あて宮に求婚する色好みの一人として登場する時に藤原の氏の名が紹介される。

藤原の君の巻に、一世の源氏正頼の北の方となる女性が「時の太政大臣のひとりむすめ」であるが、この太政大臣が前の巻に語られた兼雅らの父と同一人物であるか否かはここでは語られない。おそらくこれらの巻々では、この二つの「時の太政大臣」を同一人にするか別人にするかを、はつきり限定して考えてはいなかったろう。物語の構想に何らの関係もないからである。

しかし、物語の構想が発展するにつれて、これらの非限定の人物關係に限定した内容を与えて、系譜的關係を設定することは、長篇物語の重要な方法となるのである。兼雅とその周辺の人物との系譜的なつながりはどうなっているのか。それは主としてこの物語の後半、いわゆる才二部においてあらたに加えられるところで、可能な範囲では作者自身最初の腹案を変改する事もあり得る。父は昔太政大臣であつた。兄の忠雅は、国譲の巻では太政大臣に至る人である。それらの關係は物語の表面で語られているからここで問題にするような事はない。国譲の巻で、朱雀院の中宮が兼雅らの「いもうと」であることがわかり、左大臣正頼の二人の北の方の中の一人、「太政大臣の御むすめ」がやはり兼雅の姉であることが物語られる。これは朱雀院譲位の後に新東宮を、藤壺腹

の才一皇子にするか、梨壺腹の才三皇子にするかで、源氏と藤氏の対立が強く意識されるようになった新情勢に導かれた追加的構想と見なしてよい。

この新しい設定で、左大臣源正頼の北の方が忠雅兼雅らのはらからであるという設定は、東宮争いにおける兼雅らの態度に重大な影響を与えるのである。作者は俊蔭の巻の「時の太政大臣」と、藤原の君の巻の「時の太政大臣」とを、同一人物と限定する事で、この新設定を行なったのである。

細井貞雄の「玉松」の系図に、

太政大臣——千蔭  
橘云云

——女君 正頼北方云云  
——女君 梅壺女御云云

とあるのは、さまざま誤読が重なっているらしい。

正頼北方、一のむすめのよし藤原巻にみゆ、兼雅北方とはことはらの姉のよし蔵開巻にいへり、と注記している。藤原の君の巻に「ひとりむすめ」とあつたのを「一のむすめ」と解したのもつじつまを合わせるためであるらしい。「蔵開の巻に」とあるのは、次の詞章を指すものである。

きたのたいにおはするはいもうとなり。右・おとゞ・おほいどのゝあな<sup>(細かたカ)</sup>たの一・御<sup>(お)</sup>はらのをとうと、はらかなれどことはらにてうとかりけるを、いもうとむつびして忍びてむかへとりてかよひ給ひしなり。きさいの宮のみくしげ殿、こと御はらのいもうとなれど、いとらうたくしてかへりみ給・を、かくきこしめして、「さればこそ、ひそかにわたり給・ねとはものせしか」とて、べちなうにわたしたてまつりつ。(38オモチ)

(一二二七)

玉松の著者(細井貞雄)は、この北の対におわする女を梅壺の御息所の妹と解釈したらしい。そして右大臣家

## 宇津保物語登場人物論拾遺

の「大い殿の御方」の「異腹のおとうと」であるとしたものである。すぐ上に真言院の律師忠こそが叔母おとどを迎えたことを言っているので、続くこの一節の「いもうとなり」を忠こそ叔母おとどの妹と解したくなつたものなるほどと思うが、後世の読者がうつかり忘れやすいのは当時の「いもうと」という語の用法である。女どうしの関係で年少の方を「いもうと」と呼んだ例はない。男から見てもその女きようだいだけが、長幼の別なく「いもうと」である。これはある男性に対して、姉または妹である女でなければならぬ。こゝは兼雅の妹であると解する以外には考えられない文脈である。その兼雅のいもうとが正頼の北の方の同母妹でもあるという意味である。玉松では「はらからなれどことはらにて」を正頼の北の方との関係と見たらしいが、これははなはだまずい。「ひとつ腹のおとうと」と語っているではないか。「はらからなれど異腹にて」は、兼雅とそのいもうととの関係である。異母兄妹で疎かつたのである。それが恋愛関係を生ぜしめた大きな条件である。下の「いもうとむつび」は、男が自分の女きようだいを異性として特に強く愛する事をいう当時の造語である。

さて右の一節に見える「きさいの宮」は後に明らかになるように兼雅の「いもうと」である。多分同母姉であろう。その後の宮に仕える御くしげ殿もまた兼雅の異母姉である。「きさいの宮のみくしげ殿、こと御腹のいもうとなれど」は、兼雅と異腹の姉であると解すべきである。北の対の御方に対してならば女性どうしだから「いもうと」と書いては慣例にそむく。兼雅と母を異にする姉であることは、北の対の御方と同母であるか異母であるかはわからない。だが、「なれど」とあるから北の対の御方とも異母と見るべきである。

右の一文を口語釈して確かめよう。

北の対に御住まいの君は兼雅の殿自身の御妹である。右大臣殿のおおいどの御方の同母の姉で、兼雅の殿とは兄妹だが異母妹で、疎くくらししておられたのを、世に言わゆる「いもうとむつび」をして、ひそかに迎へ取つて通われたのである。中宮に仕える御匣殿の御方は、殿とは異腹の御姉でおわしたが、この北の対の君を子のようにしてかわいがつて御世話ななすつていたのに、このありさまをお聞きになつて「こんな事だからこそ心配してひそかにこちらにおいでなさいと申したのです」と言つて、御匣殿（貞観殿）の別納に迎

え取りなされた。

前にも述べたように、誤写はあるが、矛盾は全くない本文である。玉松の系図が根拠のない作為であることは明白であると思う。と同時に兼雅の女きようだいたい関係が、かなりくわしく新しくうち出されたことが注意を引く。

日本古典文学大系には、苦心の伺われる注を施されてあるが、結局この人物関係をすべて未詳としてある。

「兼雅がその妹と契つて秘かに北の対に迎えたというのであるが」とあるので、異母兄妹間の結婚を認められたのかと心強く思つたが、すぐ続けて「誰の事か未詳」とあるので、兼雅の異母妹とは解釈されなかつた事が知られる。(注二)

なるほど特異な設定であるが、「いもうと」という語の用例になれた当時の読者は、何の不審もおこさなかつたにちがいない。大筋にかかわりのないこのような特異な設定をあえてしたのは、兼雅の色好みの極まる所を強調したかつたからにちがいない。簗物語などの影響を考えて見る事も面白からう。

右の蔵開下の系譜設定は、一部国譲下巻の物語に利用される。忠雅兼雅らと中宮との関係、およびこの時の左大臣正頼の北の方との関係が、東宮争いに微妙に作用するという構想を展開したのである。中宮は是が非でも藤氏出身の東宮を立てようと思ひ、兄弟である太政大臣忠雅、右大臣兼雅、忠雅の長男藤大納言、同じく次男藤宰相、兼雅の一子右大将仲忠と、藤氏一族の公卿を総動員して、梨壺腹の才三皇子立坊の謀略を推進しようとする。ところが忠雅は左大臣家の六の君を、藤大納言は同じく八の君を藤宰相は同じく三の君を妻として愛している。仲忠は左大臣の孫にあたる女一の宮を妻として異心もない。兼雅もまた、姉が左大臣の妻である。皆左大臣にそむくわけにはゆかないというのである。中宮に対する兼雅の詞がその間のいきさつを語る。長文になるので兼雅の姉に関する部分だけ引く。

中將(幸徳)のあそもかねまさがあねのはらなり。それもこども侍り。(3ウラ) (一五〇〇)

「中將」は「宰相」の誤写(「宰」の草体を「中」に。「將」は「相」の借音表記)で、忠雅の三郎である。

## 宇津保物語登場人物論拾遺

大い殿の上の腹の三の君を妻としている。三の君の夫君「藤宰相」を「頭宰相」と誤読し、源民部卿と同一人物とする従来の解釈はとんでもない誤りである。参議が蔵人の頭を兼ねる事はないし、源民部卿実正の妻が大宮の腹に生まれた七の君であることはこれも動かせない基本的設定である。この宰相を藤原清正と解し、「兼雅が姉の腹」は諸本が皆誤つたものとする諸解釈ももちろん誤つている。宇津保の旧本には矛盾はむしろ少ないのである。三の君の婿たる藤宰相が、この「宰相」であるという構想は動かしはならないのである。三の君は大い殿の上の腹である。そして大い殿の上は兼雅の異腹の姉であることは、前述のように、蔵開下に語つた所と符合する。系図にしてみよう。(注三)

太政大臣——忠雅 太政大臣  
藤氏。

男

男

兼雅 右大臣。

女子 左大臣正頼室、兼雅とは異腹。

女子 中宮、兼雅と同母。

女子 御匣殿、中宮とは異母。

女子 一条の北の対の君、兼雅とは異母。

さて、兼雅をめぐる女性たちの中の一人、北の対の君について、もうすこし見てみよう。女三宮や中の君が三条殿に移り、他の女たちもそれぞれ分散したあとの荒涼たる一条殿に桜の咲いた時節に兼雅仲忠の父子が様子を共にゆくと、立ち去るにあがつて女たちはそれぞれ歌を書きとどめている。そうした聞怨のあわれを書くのがね

らいであるが、その一番に描かれているのが、この北の対の君である。

まづきたのおとどにいりてみ給へば、<sup>(3)</sup>る給・し所にかのきみの御てにて、

いもせがはすまひなりぬるやどゆへに涙をもな<sup>(4)</sup>がしつる哉（注四）

とあるをあはれとみ給・て、（38ウラ）（一二二八）

正直の所、私も「かの君」が誰であるかがわからずに解釈に苦心した。どの注を見ても中の君と注してあるが、式部卿の宮の中の君は一条の南のおとどに住んでいて、今は三条殿に迎えられているのであるから、北のおとどに住んだこの人とは一致しない。また、思いがけず、急に迎えを受けたのであるから、ここに見えるような怨みの歌を詠み残すはずもなく、そんな時間的余裕もなかったのである。中の君説は成立しない。この「北のおとど」は上に見えた「北の対」と同義であり、「かの君」が北の対の君すなわちいもうとの君であることは明白な事である。

以上で、兼雅の女きようだいとして設定された人物は大体はつきりした。次に兼雅をめぐる妻妾たちについて、前節にも少し触れる所があつたが、ここでまとめて考察して、前節に言及した所の確かめをしておこう。

俊蔭女すなわち仲忠母については、解釈上の疑点が全くないから特説しない。

嵯峨院の女三の宮は兼雅の妻の中で一番高貴な女性で、この人の事も不審な点はほとんどない。ただ、従来多少とも不審がられた問題が二つあつた。一つは、嵯峨院の巻で源仲頼について紹介的に物語る条に、

なかよりは天下一の三宮むこどり給へどとらすは。（桂宮本29オモテ）

とあるが、前田家本（古典文庫による）には

なかよりは天下一る三宮むこどり給へどもとられず。（三六二）

とあつて、桂宮本の方に誤写があると見てよい。

また、仲頼の妻の父宮内卿が、仲頼にうとくされて嘆く娘に説き聞かせる言葉の中に、



## 宇津保物語登場人物論拾遺

われのみかゝるはぢを見ばこそあらぬ、一院三宮大臣公卿のみこむすめもきこそすてらるべかめれ（桂宮本 29ウラ）

とあり、前田家本も文末が「すてら<sup>(る)</sup>かめれ」とあるだけで、上部は同じである。

この「一ある三宮」「一院三宮」という本文の処置について新見を記してみる。有朋堂文庫は前の例を「院の帝の三の宮」という本文を定めて、「今兼雅の持物たる嵯峨の院の女三宮、こゝは前の事をいへる也」と注している。後の例も本文を「院の帝の三の宮」としている。これは玉松にも玉琴にも後の例だけに「院のみかどの三の宮」と改めた本文を記し、前の例は板本に従つたと見られるのを折中したものと見られる。日本古典全書は有朋堂文庫に同じく、日本古典文学大系は玉松玉琴の処置にひとしい。

私も旧高で、この「一院」を嵯峨院と解釈し、「三宮」を「女三の宮」を指すと考えた私見を発表した事がある。樟蔭国文学才三号の「宇津保物語の中の人物―嵯峨院およびその周辺」の中で、「女三の宮と源仲頼との関係は兼雅と結婚する以前の事として認めることができる」と書き、「別人と解釈する余地のない話である」と書いた。だが、それは「三宮」を「三の宮」と補読するとすればの考えで嵯峨院の女三の宮を仲頼の話に引き出すことは、何か釈然としないものがある事も否定できない感じがある。

最近、御給（御たうばり）の故実を調べている時、古事類苑に引かれた文献の中から「一院三宮」なる名目を見出だして実はどきりとした。中世に入つてからの故実書ではあるが、「除目抄」に、

一院三宮

爵一人 三宮有女爵、東宮無之。但一院新院有女爵云云

内官一人

掾一人 目一人

一分三人

とある。この場合は、「一院」および「三宮」であり、例示であるからもちろん特定の人物を指すことはない。

「一院」「三宮」は、天子を別にすれば最高の地位である。「御給」の事は別に書く予定であるのでここでは省くが、「一院三宮」という字面は見のがせない気がする。宇津保の文でも、「一院三宮」「一る三宮」と、表記においてほぼ一致するのである。「いちるんさんぐう」と読んでみると、嵯峨院の女三の宮という特定の女性を引き出す解釈に何か知ら感じられた不安は消える。「一院三宮大臣公卿のみこむすめ」という続けかたは、たしかに固有の人物を引き出す余地のない表現である。一院については、樟蔭国文学才四号(41年11月)に「一院という称呼について」で詳論したように、最高才一の太上天皇一人に対する尊称で、太上天皇が一人だけおわす場合にもこの尊称の行なわれた例が平安朝には少なくなかった。三宮は太皇太后皇太后皇后を指す称である。

仲頼はいかに一院三宮のような尊貴なあたりから婿にと望まれても応じなかつた。

われらだけがかかる恥を見るならば堪えられなくもあろうが、一院三宮大臣公卿の御娘たちもあのように捨てられるようだから、あきらめもつく。

だから嵯峨院の巻に現れる「三宮」は女三の宮ではなく、女三の宮には色好み兼家に迎えられる以前にそのような話はなかつたと見てよい。それで物語がすこぶるすつきりする。

次に、源祐澄の妻が女三の宮ではなかつたかという説が二三あつたが、それは蔵開中巻の文を読みちがえたものであることは、旧稿「宇津保物語」中の人物「嵯峨院およびその周辺」で論じたので参照していただきたい。

さて、この女三の宮の設定は、物語の始めの部分では単純に兼雅の色好みなる事を強調するものであつた。俊蔭の巻に、

一条にひろくおほいなる殿にさまゝなるおとゞつくりかさねて、院のみかどの女三の宮をはじめたてまつりて、さるべき御子たちかむだちめの御女おほく、めしうとまであつめさぶらはせ給<sup>お</sup>ければ、(44オモテ)

(八九)

## 宇津保物語登場人物論拾遺

とあるが、それほどの色好みがすべてを忘れて傾倒した俊蔭女の非凡を証明する道具だて以上にあまり意味がなかったかに見える。それが、あて宮入内をめぐつて、あて宮と対抗すべき女の一人、梨壺の御方をこの女三の宮の腹に生まれたという線を引きことで、構想上の女三の宮の重さが増してくる。これも所詮はあて宮を引き立たせるための脇役であつた。さらに国譲りをめぐつて、源氏を外戚とする才一皇子と、藤氏系の才三皇子の立坊争いで、才三皇子の外祖母たるこの女三の宮の位置が一段の重さを増す。この布石は内侍の督の巻あたりからかすかながら用意されていて、賢明な若者の仲忠は、異腹ながら梨壺の後見を（父に代つて）心にかけて、女三の宮にもなるべく親しくしてゆく。女三の宮と梨壺とは、頼みにならない兼雅の事はあきらめていて、仲忠に頼る心が強くなる。

仲忠は生母内侍のかみと謀つて、女三の宮らを三条殿に迎えることで、梨壺とその腹の皇子の里邸が花やかになるように心を配る。女三の宮に再び平穩な日々がめぐつて来るが、これは才三皇子誕生の舞台を準備するものでもあつたのである。仲忠母子の賢さは、兼雅の昔の妻妾たちに幸福を返してあげる事で、やがてめぐり来る藤氏の栄華が固められてゆく観がある。兼雅という人は好色の世界に終始した。政治の世界にはいつてゆかない人である。仲忠の賢い処置がなかつたら、梨壺や才三皇子も荒涼たる一条の旧邸をいつまでも里としていなければならぬまい。

兼雅には子が少ない。正頼とは正反対である。作者はしかし次の時代に源氏と藤氏の交替を考えていたかに思われる。だが太政大臣忠雅の子息は、大納言も宰相も傑出した人物ではない。仲忠一人でも、左大臣の子息十余人をたばににして及ばない、やがて仲忠時代が来る。それにして男のきようだいがないのは心細かろう。作者はこゝでずばぬけた弟を急に出現させる。一条の西の対の君の腹に生まれた若君である。

では女三の宮以外の一条の女君たちはどのように設定されていたか。構想上の意義にも少しずつ触れて、あげてみよう。

まず、式部卿の宮の中の君。この人は俊蔭の巻の「さるべきみこたちかんだちめの御むすめ」とあるのを承けて、親王家の姫君として登場したものである。作者はこの姫君に興味のある境遇性格を与えている。十三歳で兼雅のもとに来てまもなく父みに死なれ、侍女たちの言うままになる善良すぎる弱い性格である。ある面では源氏物語の常陸の宮の姫君末摘花と類似する点がある。すぐれた人ではないがあわれむべき人である。男に忘れられてから久しくもとの家で待ちくらしている点、のちに男に迎えられてすなおに従つてゆく点も、末摘花に通ずるものがある。ちがうのは、風雅も一往は解していて、兼雅とも父みこの意志でまともに結婚している点である。姫君タイプで世才がなく、困難に堪えぬくような精神力もなく、一口に言えばたよりない女である。この性格描写には、もともと品定め癖の強い作者の意図的なものであるにちがいない。

この姫君がはじめて物語に登場するのは、蔵開中巻で、仲忠が父のために一条の女三の宮を訪問した時、南のおとどから柑子を一つ投げつけた女、それがこの中の君だったわけである。菓実を投げるといふのは、潘安仁の故事であるが、物語意匠への影響から言うならば、むしろ遊仙窟を摸したものと言うべきか。(注五)

是時<sup>ノ</sup>日<sup>ニ</sup>將<sup>ニ</sup>夕<sup>ニ</sup>。携<sup>ヘ</sup>樽<sup>ヲ</sup>就<sup>ニ</sup>樹<sup>ノ</sup>蔭<sup>ニ</sup>。當時<sup>ノ</sup>、樹上<sup>ノ</sup>忽<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>李<sup>ノ</sup>子<sup>一</sup>、落<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>官<sup>ノ</sup>懷<sup>中</sup>。下官<sup>ノ</sup>詠<sup>フ</sup>曰<sup>ハ</sup>、問<sup>フ</sup>李<sup>ノ</sup>樹<sup>ノ</sup>如何<sup>ニ</sup>意<sup>ハ</sup>。

不<sup>レ</sup>同<sup>ニ</sup>、應<sup>レ</sup>来<sup>ニ</sup>主<sup>ノ</sup>手<sup>ノ</sup>裏<sup>ニ</sup>、翻<sup>レ</sup>入<sup>ニ</sup>客<sup>ノ</sup>懷<sup>中</sup>。五嫂<sup>ノ</sup>則<sup>ニ</sup>報<sup>フ</sup>、詩<sup>ノ</sup>曰<sup>ハ</sup>、李<sup>ノ</sup>樹<sup>ノ</sup>子<sup>一</sup>、元<sup>ノ</sup>来<sup>ニ</sup>不<sup>ニ</sup>是<sup>ニ</sup>偏<sup>ニ</sup>、巧<sup>ノ</sup>知<sup>ニ</sup>娘<sup>ノ</sup>子<sup>一</sup>意<sup>ハ</sup>、擲<sup>レ</sup>菓<sup>ヲ</sup>到<sup>ニ</sup>渠<sup>ノ</sup>辺<sup>ニ</sup>。(慶安版四七ウラ)

娘子は崔十娘で女主人公、五嫂はそのあによめ、下官は主人公(作者)張文成の自称の詞。菓実が主の女の意中を知つて客の懷中に飛び入るといふ意匠である。蔵開中巻では、

大将<sup>ノ</sup>「なくてちりにしふるさとの」といひてたち給へば、南のおとどよりかうじを一<sup>③</sup>・なげて大将をうつ人あり、「まちとるなるこそ」ととりつ。(33ウラ)(二一二七)

この南の殿に住む女が誰かはここではあかさされない。三条殿でこの柑子を開いて見ると中に歌が入っている。むすびをきて我・たらちねはわかれにきいかにせよとてわすれはてしぞ

## 宇津保物語登場人物論拾遺

とある、この歌がこの人の経歴と、あどけない心ばえを示している。続く兼雅の述懐、

このかうじなげいだしつらん所は、こしきぶ卿の宮のなかの君也。ちゝ宮のめしでのたまひしやう、「われなんよにひさしくあるまじき。こゝにらうたしとおもふものなんある。あだくしくはいはるれ・、さりともおもひてなん」とてたびたりし人也。十三にて見そめて、いくばくもなくて宮かくれ給・にき。そののちほどもなくてぞこゝにはきにしかば、げにいかにおもふらん。(35オモテ)(一一三)

とあるので素性経歴を知らされる。

そののち、女三の宮を訪れるついでに、中の君の南のおとどに兼雅が立ちよる場面がある。蔵開の下の巻、左大將はしのびて中の君の御方にまいりてみ給へば、うちやぶれたるびやうぶ一よろひばかり、なつのかたびらのすゝけたるきちやうひとつふたつたてゝ、君はあやかいねりのところへやぶれたる一かさね、すゝけたる白ぎぬきて、火をけのすゝけたるに火わづかにおこしたるに、だい一・たてゝ、しろきたうわんに、おもひめめきてすこしもりてすくをり。はじかみ、つけたるかぶら、かたいしほばかりして、よさりの御物にもあらず、あしたの物にもあらぬほどにまいりたり。御まへにはふるびたるまきゑのなぐしのはこ、さやうなるすゞりばこすへて、くしのはこ、ふたをとりのけて、一日のかうじのつぼのゝこりをとりに、めのとかけて見などす。そのむすめむまごなどわらはにてあり。しにもづかへひとりばかりなむありける。

(13ウラ)(一一七一)

その貧窮のさまが描かれている。世間知らずのお人良しの姫は、万事めのとまかせで、めのと一族のくいものになつてゐるようすであつた。乳母がむすめ孫まで同居させてゐる点でそれを示そうとしてゐるのである。源氏物語の蓬生の巻の描写ほどではないが、宮家の姫の零落を描き、その裏にあくどい人間ののさばるさまをもほめかして、作者の正義感も察知される一節である。

とかくの事があつて、この中の君も三条殿に迎えられる。年は三十八九になつてゐる。兼雅の意見で一条で使つていたむさくるしい衣服調度類はめのとの族類にとらせて、新しい家の券などいろいろ与えて、これからは人

にごまかされないように注意する。

これはたしかならん物にいれてをき給へれ。<sup>(お)</sup>これをさへはかなくなし給・な。<sup>(ふ)</sup>(35オモテ)(一二二)

この中の君のこめかしきは、国譲中巻でも兼家が物を贈り与える時に、半紙に「かひなく例のとりちらされ給ふな」と書きそえなければならぬ程であつた。

源氏物語帚木の雨夜の品定めにて、「もとはやんごとなきすぢなれど、世にふるたづき少なく、時世に移ろひて、覚えおとろへぬれば、心は心として事足らず、わろびたる事どもいでくるわざ」と品評された、そのような類型に属する女性であつた。そうした壁を自分では破れない、いつまでも上衆めかしくこめかしい人としてこの人は描かれている。その点ではこのような端役脇役の方が面白く書かれているのが宇津保であつた。

一条殿に住む人々の中で、残つたのは、

① 昔の右大臣橘千蔭の妹——東の対

② 梅壺の御息所——西の対

③ 兼雅の異母妹——北の対

④ 源仲頼の妹——東の一の対

⑤ 昔の源宰相の娘——西の一の対

の五人であつた。この五人は一括して語られたため、解釈の混乱があつたことは、上巻の論述のついでにある程度触れた。この中で、千蔭の妹を梅壺の御息所と混同した解釈の誤りについては前節に説いた。それに関連して故源宰相の娘を混同したような本文改訂の混乱についても弁証した。またこの節の前半で、兼雅の異母妹が一条の夫人たちの中にあることについても証論した。源仲頼の妹だけは、仲忠が仲頼に対する友情もあつて、妻の女一の宮の二条院に引き取つていぬ宮養育係としたので、物語が明瞭で右の混乱に關係しなかつた。

この五人が、最後に一条を立ち去るのであるが、そのくぐりには忠頼妹の分を除いてすでに引用して解説しているのでここには省く。ただこの五人がはつきり五人に分析されることを証明される物語が続けて書かれているの

## 宇津保物語登場人物論拾遺

で、千蔭の妹と梅壺の御息所と宰相の君とがそれぞれ別人であることを、はつきり裏づけてみる事にする。  
花盛り、興ある一日、兼雅仲忠父子は、「一条の人げもなかなるを、いかに住みなしたると見む」と、もろともにやつて来た。

まづきたのおとゞにいりてみ給へば、ゐ給・し所に、かの君の御てにて

いもせがはすまひなりぬるやどゆへに涙をもなをながしつる哉

とあるをあはれとみ給・て、にしのためのかういの御方をみたまへば、ゐ給・しところのはしらに、

ちかゝりし雲のおりゐてみるべきに風ふくちりとまどふ身はなぞ

とありけるに、「ゐんにさぶらひしをいてまかでにしぞかし。あないとおし」と見給・て、おなじ一のたいをみ給へば、

ふるさとおほくのとしをまちわびてわたりがはにもとはじとやする

とあれば、「まして、あはれいづくへならん。いかでこれが返・事せん」とおぼす。ひんがしの二のたいにいりてみ給へば、そのたいのまへに、さまゝのたいにあたる柱に、

こぬ人をまちわたりつるわれなくてまがきのたけに誰をはらはん

とあるを、「ふるものといひしところ」とおぼして、一のたいにいりてみ給へば、ゐたまひしはしらよせに、

きつゝみしやどにぞかげもたのまれしわれだにあらぬかたへゆくかな

と、さうにかきたり。おとゞ「このひといづちならん、はゝ宮の御もとにはたあらざめり」とのたまへば、大将「なかつたなん、二でうのゐんにわたしたてまつりて侍・。いまかしこひろうなりぬべかなれば、そこ

にかの物したぶがあそびする人なくてさうゝしくし給へば、むかへ侍・。」と申・給ふ。(38 ウラゝ) (二二二八)

この中で、千蔭の妹君の歌が「こぬ人を」であることは、風葉和歌集にも「うつほの橘右大臣のいもうと」と

して引いている事でも裏づけられる。東の対に住むことは蔵開中巻で語られている。西の対の更衣は、蔵開中巻で旧本では梅壺の御息所と称したとある、それがこと符合するのであつて、本文を改めてまで梅壺の御息所すなわち千蔭の妹とするのは無意味であることが知られる。兼雅がここで「院に候ひしを」と言っていることも注意すべきで、「院」と言えばこの時点では嵯峨院しかないのである。

北の対の君については前に述べた。いもうとの君である。異母兄と結婚する事は当時絶無の事ではなかつたが、普通の事でもなかつた、それがいかに苦しい事であつたかが、その歌「いもせがは」に訴えられているのである。「ついに住まずなつてしまつたものを、いたずらに涙を流したことよ」という意であるべく、才二句「住まずなりぬる」であるべきは論なし。この歌の初句「いもせがは」は夫婦の交情を意味する事は無論だが、同時に「いもうとせうとの間から」の意を暗にふくめたのであることには傍例もある。(注六)

南の一の対の君が宰相の君であることは、楼の上の上の冒頭にこの歌が再び書かれてこの人を改めてクロージアアップしていることで確実にされる。

兼雅という一人の色好みをめぐる夫人たちは、右の五人を俊蔭女・女三宮・式部卿の宮の中の君に加えて八人がクロージアアップされている。桂の巻に「三の宮を思ひし時も十七八人ばかりもてありし」とあるから、この八人については作者が特に書いてみたいという意欲を感じたということになる。それは何であらう。俊蔭女だけはそのすぐれた宿世を語るべく虚構されたものであり、また女三の宮にも多少物語主題と関連があるのであるが、他の六人に対する作者の関心のありかたはいささか異なる。また俊蔭女の場合にしても、前世に天女であつてこの世界に転生し来つたというような非凡な資質や、現世における数奇を極めた運命の変転をさしおいて、現実の人間としての他の七人と並べられる時、その聡明、その心ばえのやさしさ、その寛容さ、その節操の確かさ、すべて人間としてのあらまほしさを具した女性として造型されているのであつて、他の七人と対比されるのである。女三の宮は品高き女性としてのあてはかさが主とならう。兼雅が離れ去つたのちも、梨壺の御方の母として



## 宇津保物語登場人物論拾遺

その後見をりつぱにやつているし、悲嘆やぐちに明け暮れるような所は全くない。愛を奪い去つた俊蔭女を怨む心も見えず、その女を母とする仲忠に対してもやさしく物静かに接することができる。内侍のかみの巻で、仲忠が自分の母のために御几帳を借りに宮のもとに立ち寄ると、快く貸し与え、

月ごろわかき人のひとりさぶらひたまへば、うしろめたさにこゝに侍・を、こと人はさもこそとうたまはざらめ、そこにさへいとうとおぼしたれ。(女三の宮は娘の後見として梨壺にいた。) (46ウラ) (八二〇)

と言う。「あなたにとつても妹なのだから、梨壺の事は心にかけて親しくしてやつてほしい」という気持を、きわめてすなおに述べている。これは心の広い人でなければとても言えない言葉である。仲忠もまた、

かずならずおぼさるとも、よの人のしたしくさぶらはんよりは心におもほさんなんいとうれしく侍・べき。(同)

と言ひ、宮はかさねて、

さらにものたまうかな。(ふ) このさぶらひ給・人は、おやもおもほしわすれたまうめれば、よの中にあはれに心ばそげなる人なめり。はらからもなにつけてかおぼさむ。なを、あはれるものゝ心ぐるしきにおもほしととぶらひ給へかし。(同)

と懇望する。このすなおさがとりもなおさずあてはかさである。これはさらに端的に、兼雅が仲忠の勧めに同意して女三の宮を三条に迎えるために一条の旧邸におもむいた時の久しぶりの対面の場に現われる。つらい人との再会であるが、怨みのそぶりもなく、きわめて平静である。巻は蔵開下、

おはする所ありさまむかしにをとらず、御しとねしきて、みすのまへにる給へり。宮はむかしの御かたち(お)にことにとり給はず、あやかいねりのこきうすき、をり物のほそながなどたてまつりて、御(お)ひをけきよらにておはす。すびつに火などおこしたり。御だいひとよろひ、ごきなどして、れいのやうにて物まいれり。(あ)

(14ウラ) (一二三以下)

と書かれている。十五年の歳月が消えて昔がただちに今に連続しているかのようなのである。男にはなほだしい気ま

ずさを感じさせないやさしさとも評されようか。二人の話あいには静かに進行する。次の一節を見よ。

宮、さらにとしごろ見ざりつるともおぼしたらで、いとおいらかに、「よの中は、いとよくかくてもありぬや。たゞくるしくおほゆるは、身(あ)のうへもみやも『心と世の中にすみはふれて、みかどきさきの御おもてをふすること』の給(あ)・なれば、えまいらでとしをふるなむ。かなしきは、昔はしばしこそ(あ)の給(あ)・しか、ときくはまいりかよひし物と思(あ)・なむ。そわうの御うへはおもひたまへらるゝ。さればいまはともかくもしなしすてられなんまゝにをとなん、一日中納言にものせし」との給(あ)・ほどに、おとゞ・御まへにむかしのやうにて御だいまいれり。(15オモテ) (一一七四)

この人の理性的な性格をよく書けていると思う。ただし、本文批判や解釈に考えておくべき点があるので念のために説明を加える。①「いとよく」を板本「いとゞかく」とあるのは誤りである。②を「ありぬべしや」と改めるのもまずい。③は「身のうへ」では意味のわからぬ文になる。必ずや「院の上」とあるべきで、(院↓る↓身)の誤写経路が考えられる。「院の上」は嵯峨院すなわち父みかどであり、「宮」は母太后を指す。④以下「しばしこそ宣ひしか」は父みかどたちが三の宮の結婚に反対でしばらくは御叱りもなさつたが」という意である。「時々は参り通ひし」は敬語のない点からも、三の宮が父上母上のもとにゆききした意に解すべきである。「そわう」は孫王で、当然梨壺の御方を指す。「思ひ給へらるる」は謙讓表現だから、「思われます」「心配になります」である。女三の宮の語る詞だけを口語訳して私の解釈の責任を明確にする。

世の中の事は結構このままですぐせますのよ。ただ心苦しく感じますのは、父の院も母宮も「わが心のつたなから、男にまで捨てられて、うちのみかどや中宮にお恥づかしい思いをさせることよ」と仰せられてたそうで、恥づかしくてとても参れないで長年すごして来た事です。悲しいのは、以前はしばらくは不覚な結婚を責めてでしたが、やがて御怒りも和らいで時々は院にも参つていたのに、と思う事だけです。それに孫王(梨壺)の事は心配です。ですからもうどうでもあなたのなさるまま、お捨てになればそれであまじくて、と先日中納言にも申しました。

## 宇津保物語登場人物論拾遺

静かなる怒りと評すべきか。情に流される事のない人である。玉琴ではこの一節も大きく改作してしまつていて、有朋堂文庫・古典全書もそれに従つてゐるが、認めがたい。古典文学大系は旧本に近くなつてゐるが、本文にも解釈にも同意しがたい点がある。詳論を省く。

中の君の事は上にも解説したが、女三の宮とは対照的である。彼女の貧窮をもたらししたのは、半分は彼女自身の才覚のなさであつた。おなじく身の宿世を嘆く言葉にも性格の差異が示されている。

われかくていみじきさまを見えぬるはさもあらばあれ、ことよにやはへたる、かくなしたるにこそあめれ、これをかくすと見えぬるはいみじくかなしき事。わがさいはひなく、はぢをみるべきすくせのありければ、こゝらの年月こそあれ、かゝる年月をみることを。(14オモテ)(一一七三)

この中の君の言葉には、女三の宮の言葉に比べると、抑制がない。子供のように単純である。この君の姿態を蔵開下に次の如く描いている。

君、よべおとゞのつゝませておはしたるあやかいねり、をり物・ほそながなどき給・て、とし四十に一・二・たうねど、いとあてはかにこめきてらうたげなるかほして、かみたけに二尺ばかりあまり給へり。いとわかく見え給。(35オモテ)(一二二〇)

親王家の姫君としての、あてにこめきたるらうたさがこの人の身についたものであつた。

兼家が特に愛していたのは、故源宰相の娘、西の一の対の君であつた。住まいに書き残した歌を見て、この人だけに「いかでこれが返・事せん」と思つた程である。この人の人がらがくわしく語られるのは、楼の上の巻である。兼家が、この人を追想して言う。

心ふかくおかしう、かたちなどもことなむなかりしを、いかでこればかりをありどころをきかましかばたづねてしがな。(1オモテ)(一六七二)

仲忠が父の心を体して探しているうち、石造寺でこの君とその子（小君）に出逢う。そこで仲忠が受けた彼女の印象は、

日くれてびやうぶのもとにてたいめんしたまへり。いとあてに、けはひなどもしきぶきやうの君よりも心にくくはづかしげにものし給へり。院の女御の御こゑにおぼえ給へり。（４オモテ）（一六七八）

というのであつた。「院の女御」は仁寿殿、声が似ているとは、やはり計算された表現であろう。とすれば、故源宰相が、源正頼と血縁の近い一世の源氏である事を暗示したものである。小君が仲忠と共に詩を誦する声のよさや、琵琶の巧みさを通してこの人の才芸の非凡さも知らされる。故源宰相も「心はえにくませたまはじ」と言つて兼雅に将来を托したのであつた。筆蹟もみごとで、兼雅は内侍のかみに、

これ見たまへ。てとこそ、このけぢかく見し人々よりはよくかきたれ。みどころある・まにおかしくぞかきたるや。（６ウラ）（二六八五）

と推賞し、内侍のかみも、一所に住んでむつまじくしたいと願う。かくて母子ともに三条の東の一の対に迎えられることになつた。仲忠がその前日訪れて、この君をかいまみる。

いとくくろきうちきのつやゝかなるひとかきね、うすきはなだのあやのみりわたかきねてきてゐたる人の、かみいとをよりかけたるやうにつやゝかにながげなり。ひたひにかゝれるほど、いとうつくしげなり。そびやかになまめかしきかたち、ないしのかみ・御やうだいかたちにおぼえたり。（７ウラ）（二六八七）

旧一条の夫人たちの中ではずばぬけた容姿である。その子小君も愛らしく、生いさきを楽しませるすぐれた資質を見せていて、相依つて懸命に生きてゆく母子の姿は、美しいというほかはない。尚侍と似ていると書いているのも、あるいは、俊蔭の妻となつた一世の源氏と故源宰相との血縁的つながりを暗示したものかも知れない。ありし君、かいねかのこうらすきはりき給・て、つるはぎにて、いとちゐさくおかしげなるびはをかきいだきて、まへに給へば、いとうつくしと思ひ給うてかみかきやり給・てつき、いとうつくしげなり。この君びはせふとおかしくらうくおかしくひき給・つゝ、君「いまさへこのちゐさきびはをひきたまふはい

## 宇津保物語登場人物論拾遺

とみぐるしからんは」とのたまへば、「きは、<sup>(お)</sup>をんひぎにゐてひきはべらん。たゞたふれに<sup>(こ)</sup>・はべり」とて、おほきなるをひき給<sup>(ま)</sup>・、いと上ずなり。(7ウラ) (一六八七以下)

御匣殿にたよつて一条を去つたいもうとの君と、忠こそ律師に引き取られた千蔭のいもうと君については、その後の消息もない。兼雅の色好みの多様さを語る道具立てにすぎなかつたと見るべきである。

梅壺の御息所は、楼の上の上の巻で、兼雅に迎えられて三条に来るが、これは御息所の方から怨みかけて、それがきっかけとなつたものであつた。色好みと騒がれた女人の末路のさびしさを思わせる。この人は忠こそが十四歳の時にすでにみやすどころと呼ばれているのだから、兼雅よりも多少年上であつたと見るべきであらう。

かように、色好み兼雅をめぐる女君たちをさまざまに描きわけようとする構想は、宇津保物語の一つの新機軸であつたと認めることができる。それはまだ低次の着想であつたのであるが、ここから一つ脱皮したものが、源氏物語であつたとも言える。兼雅をして説かしめる、

かういのかたは、らうくしく、くせんくしくものしたまふ。しきぶきやうの君は、心おさなくて、めのものいひなめし。たいの君は、おいらかなれど、こゝろふかければこそ、人々の御ためにも心やすけれ。

(楼の上、上、16ウラ) (二七〇七)

と。宇津保の物語に散見する品定め趣味の一つの現れである。このあたりにも宇津保から源氏へとつながる線が見えてくる。

## 三 左大臣源正頼の子息たち

作者は、一世の源氏である正頼を一代の子福者と描き出した。女の子が十四人、男の子が十二人(十三人かも知れない)、これを二人の北の方が生みひろげた。ライバルの兼雅が二十人にも及ぼうという多くの女性と交渉

を持ちながら、男の子が二人と女の子が一人だけというのが対照的である。作者ははじめは正頼の家の子どもたちを、「変化の者なり、天女のくだりてうみ給へるなり」と、理想的な一族として設定したが、これは九の君をはじめとする女君たちに焦点を置いたものでもあつたが、物語の後半になると、超人的性格は消滅する。正頼がみずから一族の凡俗さを慨嘆するようにまでなるのである。

まさよりこどもあまたもて侍れど、まことに、くやしうおもてふすべきは侍らねど、大<sup>(上)</sup>ずまじらはんにをもだ<sup>(お)</sup>しく侍<sup>(お)</sup>・べきもなく、人のあそびせんところにはくさかりぶえふくばかりの心どもにて、いとむしんにて侍り。からうじてとぎまにまじらひてもはちなかりしか<sup>(ものは)</sup>は、はかなくてまづかくれにき。さればかたじけなくとも、いまはたおやおおはしまさぬを、たのもしげなくともとの御かはりとおもほせ。まさよりはむかし侍りしものゝかくなり給へると思ひ給えん。<sup>(三)</sup>（国議上、53ウラ）（二三六一）

新中納言源実忠に、心を改めて出仕するように勧奨する言葉である。この正頼の言には現実主義的な思慮が見える。藤壺および才一皇子の後盾となるべき一族に人材が不足することを思つて、同族の実忠の才を惜しんでいるのである。来るべき立坊争いは決して樂觀を許さない情勢になつて来た。朱雀院の中宮を核として敵方に動員され得る藤氏の人々には、新太政大臣・右大臣・右大将・大納言・宰相等が地位を強化して来たし、次のみかどたるべき東宮は中宮の腹である。正頼の子息たちは数は多いが上達部は忠澄師澄祐澄の三人だけで、それも比較的下臈である。正頼の焦慮はそこにあつた。物語の冒頭で「変化の一族」とたたえたのは、遊仙文学の系統を引く浪漫主義であつたが、物語の後半で人材の乏しさを嘆いたのは、現実主義への変貌であつたと言えよう。

源正頼の家の息女たちについては旧稿で論じたので、この稿では息子たちについて、従来誤解があつたと思われる諸点をあげて、弁証しておきたいと思う。

藤原の君の巻で、あて宮十二歳の時点での兄弟姉妹たちおよそ二十七人ばかりを総まくりの説明しているが、この説明自体にいくばくかの矛盾がもとからあつたように見うけられる。あるいはこの部分は、物語者の手控えのように書いて添えられたものであつたかも知れない。大い殿の御方の御腹に男四人女五人、宮の御腹に男

## 宇津保物語登場人物論拾遺

八人女九人と書いてあるが、「十一郎ちかずみ」のあとに男の子が二人生まれたとすると、男十三人になつて一人だけ説明の誤差が生ずる。だからといつて近澄を最後に生まれた二人の中の一人とするような本文改変はとんでもないまちがひである。「ちかずみ」と名のりを持つことは元服している事を示すのを、六歳の宮あこと同年とするような改変は、その改変がいかなる性質のものであるかを暴露している。

さてこの前後の本文が誤脱のきわめて多いことは周知の事であるから、この子どもの人数の誤差は、本文の高部批判で解決できるかも知れないが、誤差をそのまま誤差としてさしおくべきである。片桐洋一氏が、「宇津保物語登場人物綜覧」(宇津保物語新攷所載)において、物語中に八郎に該当する人物がどこにも姿を見せない点に注意して、原態は「十郎ちかずみ」であつたろうという解釈をしていられるのは、傾聴すべきである。私は、藤原の君冒頭の総まくり的人物紹介には、もともと未完成な点があつたのではないかと思う。「おほいどの、おとこよところ」の方が修正を忘れたままに残つたものであるかも知れない。あるいはまた、作者の初案に大い殿腹の家あこがなかつたかも知れない。それが嵯峨院の巻あたりで、宮あこと並んで陵王を舞わせる要求から一人加えられた。そこで、藤原の君の紹介文の一部を修正して、

又さしつゞきおなじとしのおとこぎみふたところながらうみ給<sup>(ふ)</sup>。(2) (一二四)

とした。傍線の字句が添加された、と仮定してみる事もできる。年齢の紹介の部分で、

その御おとゝのおとこ宮<sup>(ち)</sup>、六<sup>(三)</sup>・になんおはしましける。(3ウラ) (二二七)

が複数の表示がないのは、宮あこ一人を言つて、修正もれでもあらう。(注七)

「かくて太郎君」以下の詞章が、才二次的にはめこまれたかにも感じられる。すぐ上が、一往紹介を終えて、「いづれもくかたちきよらにこゝろよく……」と総括評を添えて結びながら、また各個に紹介するのも、木に竹をついだ感がある。この中で「八郎」という文字に続くべき語が見えないのは、脱落とも、本来空白のまま残つていたとも考えられる。

総じてこの冒頭紹介の詞章は、物語の展開に従つて修正を加える予定であつたかと思われるふしがある。冒頭

紹介を標準にすると、くいちがう点があまりに多いのである。これがむしろ混乱の震源になつてゐる。

十一郎近澄の物語上の位置についても言える。はじめは大い殿の上を母とすることに定められているが、物語の後半になると、どうもあやしいのである。大宮腹らしく常にふるまわされている。特に、国讓上で、あて宮が出産のために里邸に退出している時に、不慮の事故を恐れて、はらからの君だちが番をきめて警固する中に、この近澄も加わつてゐるという点は、当時の風習としては、異母兄としては倒底考えられない所である。

仲忠が女一の宮を迎えようと藤壺の御方に立ち寄ると琴の音がする。かいまみしようとするが、警固が厳重ですぎがない。

宰相の中將の君藏人・少將宮あこの侍従などは、みかうしのうち、もやのみすあげておはします。大將みはしよりやをらのぼりて、みすのはざまにこもりてあるをもとめ給へど、いみじくうるはしくつくりたればひまもなし。(40オモテ) (一三三)

藏人の少將は近澄である。この人が異母兄ならば、よもやあて宮の身に近く詰めて警固にあたる事はあるまい。

このあたりの近澄関係の記事は、事毎に大宮腹の君だちに近い方向を示している。大宮がこの藏人の少將の色好みをしきりに心配している口つきなどもそうである。近澄は女二の宮に心をかけて、すぎあらばとねらつてゐるのである。あて宮と大宮とがそのような男の子たちの動きを心配している。

宮「世・中にくるしかるべきものは、わかき人のすいたる、こにてもたるわざなりや。みぐるしういみじき物を見るこそいといのちながくなりなまほしけれ。このちかずみといふ人の、わらはよりあやしくすきてみえしかば、そへ物になりぬべしとて、かしこにもゆるしたうばでありしものゝ、人さだめてありしかば、めやすしとみしを、いかゞしけん、そこにもあらで、たゞかなたにのみありて、をのれがせん(事)なにわびぬ。そのいふやうは、『心ひとつにえたえずは、いかにもくとおもへども、おやのさきにいのちなき人あらはなれば。かく申・に、そのごとくなし給へとはあらず、仏神にもこのことなおもはせ給・そと申させんなどこ



## 宇津保物語登場人物論拾遺

『そ』などいひつゝ。つねによるこびたのしむをみるこそいとよにへまほしけれ』ときこえ給<sup>(ふ)</sup>。(14ウラ)

(一二七二以下)

右の文中の「かしこ」は正頼を指す。「あなた」は近澄の曹司を指すと見てよからう。文脈の明らかでない点があるが、「みぐるしういみじき物を見るこそ云云」は、「容貌も醜く、ひどく拙い子を見ている方が気が楽で長く生きたくなるものです」で反対をあげたもの、「つねによるこびたのしむをみるこそ云云」も、「色好みなどなく、通常に悦び楽しんでる平凡な子を見ている方が却つて長く生きていくくなる」という意であろう。この大宮の語気は、自分の腹をいためた子に対するものであると思われる。

蔵開下には、この人を、

こ侍従のみをとそ、たいふなりしは、うちのくらのかみにてくら人にぞものし給<sup>(ふ)</sup>、こじじうにはかたちも心もまさりたる、たぐひなき色ごのみにぞありける。かはらけとりていで給へり。(7ウラ) (一一五八)

と書いている。特に「故侍従の御弟」と書いたのはなぜか。近澄を仲澄の同母弟として考えているのでなくては解しにくい書きかたである。

近澄が大い殿の上の腹であるということは、藤原の君の冒頭紹介ただ一つである。そこでははつきり「おほいどの、御はら十一郎ちかずみ」とあつた。官位名がないのは無冠であることを示すとすれば、年齢は十五歳前後であろう。そのあと、春日詣の巻で人々が和歌を詠む中に加わり、「大夫ちかずみ」と書かれている。十一郎ならば兄であるはずの九郎清澄十郎頼澄の前に置かれている。この兄弟だけを抜いてみると、七郎侍従仲澄の次に並んでいるのである。「大夫近澄」とは、まだつかさを給わつていないことを示すから清澄より年長ではないであろう。よほど特別に待遇されている点から考えると、このあたりですでに近澄を大宮腹として書くつもりに変わつて来つつあつたらしい。このあとでは、宮あこが同様に、元服とともにまず叙爵され、任官はあとに延ばされている。

近澄は春日詣の時十七八歳であろう。これは藤原の君の年立の考えかたでまゐる。このちきるべき時期に内

蔵頭蔵人に任ぜられていた事が蔵開下で知られるが、それから間もなく少将に昇進して、以後蔵人の少将と呼ばれる。

つとめてつかさめしはてゝのゝしる。いとおほくめしたり。ゑもんのかみにたゞずみの中納言、右近中將に  
はちかずみのくらのかみかけて、左衛門のぜうにあこぎみとなり給へれど、宮にはよろこびも申させたまは  
ず。(21ウラ) (一一八九)

とある。近澄の内蔵頭が右近少将を兼任したと解すべきである。文脈からもそう読むのが自然である。日本古典  
文学大系等に、句読を変えて、「右近少将にちかずみ、くらのかみかけて左衛門のぜうにあこ君」と読んでい  
るが、句読も不自然であるし、内容からも納得しがたい。内蔵頭は拾芥抄によれば従五位上相当で、元服して間も  
なく、叙爵もしていない家あこの初めての任官には高すぎる。家あこは蔵開上に「今は六位なれば」とある。そ  
の叙爵は国讓下に見えてこの任官からはば一年後の事である。家あこの初任は従六位下相当の衛門尉は適当であ  
る。

この一節の解釈には、まだいろいろ問題があるようで、近澄を家あこと同一人物であるという誤解にもとづい  
て、ここの「あこ君」を宮あことする説が見える。大系には「正頼十二郎行純か」と注してあるが、これは藤原  
の君冒頭紹介の詞章を大幅に改変した玉琴等の本文「十一郎ちかずみ年六、宮の十二郎ゆきずみおなじ年」に準  
拠して、宮のあこ君と見たものである。

この一節の「あこ君」が家あこである確実な直接的証は、国讓下に見える。

いへあこのゑもんぜうかうぶりえたまふ。(19オモテ) (一一五三五)

である。前年衛門尉に任ぜられた家あこ君がこの年の秋叙爵した事を記している。この国讓下の「いへあこ」を  
誤りと見る説は認められない。大系には、

「家あこ」は蔵人少将だから、「宮あこ」の誤であらう。宮あこは内蔵頭兼左衛門尉になり、直ぐ侍従にな  
るから、従五位下(侍従)から従五位上もしくは正五位下に昇進したのであらう。

## 宇津保物語登場人物論拾遺

と注してあるが、近澄家あこ同一人ということ為準拠としている限り、至る所で改訂を施しつつ読まねばならなくなる。また「かうぶり得給ふ」を既に叙爵している人の加階の意に用いることはない。

宮あこは、蔵開下の前記のつかさめしの時には、まだ叙爵も任官もしていなかった。それはそのややのちに、兼雅と仲忠とがそのうわきをする事で示されている。

「宮あこはなどうかつかさめさせ給はずなりぬらん」大将「まづかうぶりをとにや侍らん」(25ウラ)(二一九八)

本文に疑うべき点はない。宮あこは、まず五位に叙していただいて、そののちにしかるべきつかさを望もうと、父正頼が予定しているらしいというのである。この物語では、仲忠や近澄がそのエリートコースを進んでいる。仲澄もたぶんそうであつたろう。六位の官から始める者と、まず叙爵から出発する者とは、その後の出世も全くちがう。

さて、本文に疑うべき点なしと言つたが、有朋堂文庫以下ほとんどが、「などうかさも」の部分「などうかさも」となっている。これは板本等が「かつ」二字をおとしたことに由来するらしい。前田家本桂宮本に従うべきである。

宮あこはこのあと叙爵と任官の事が語られているのである。

宮あこかうぶりえ給ふ。(29ウラ)(二二〇七)

宮あこじぶに、(32ウラ)(二二一五)

この宮あこの侍従とちかずみの蔵人の少将とがしばしば並んで活躍する事から、ちかずみ即ち家あこかとの錯覚を生じたものである。それはすこしく読み進めば、ただちに判明するはずのものであつた。

蔵開以下における蔵人の少将近澄はいよいよ大宮の側に近くふるまつている。兼雅仲忠のうわき話の続きに、  
 (お)をとど「くら人の少将の、をとまきりになりわかれぬべかめるかな。たゞいまのうへの人はこれひとりに  
 (なりぬめりか)なめりかし。こゝろもよげなり。たれをかもたる」大将「侍りしかど、いまは侍らで、みやあことふた

り、おやのもとになん。少将はあるまじき心ばへなれば、おやなどせいし給(ふ)なれば、『さてなかたどはべうずや』(6)とものすなれば、『それはふいに給へばこそあれ、きんちはいかなるみち、なによりて』となん、せちにせめ給(ふ)なれど、思(おも)やまでなん、心ちもしらぬべき物なめりとんなげかる(なる)。』(25ウラ)(一一九八以下)

近澄が妻とわかれて、宮と一所に親のもとに住むというのは、母宮の住むおとどにという意味である。國讓上卷に、左大臣邸の東の二の対に藏人少将と大夫の君(宮あこ)が住む(28ウラ)(一二三〇三)と書いているのはこれと照応したものである。

國讓上卷、右大将仲忠が任大納言のよろこび申しに大宮のもとに来る。その時、藏人の少将をもつて申し入れる。

右大将かぎりなくさうぞきてはなやかに、おちにもちくにもすぐれて、大宮をおがみたまつり給(ふ)。藏人の少将して、「しばし侍(る)べきを、こゝかしよろこび申さんとてなん。御かたにはいまことさらにさぶらはんとときえ給へ」とていで給(ふ)を、宮も御かたもすべてひとみすのうちにたにゐてまつり給(ふ)て、(51ウラ)(一二三五七)

「御かた」は藤壺(あて宮)、この場合近澄が大宮および藤壺の御方への取次をしているのは、いわゆる内許された者であることを示す。これも近澄が大宮を母とする方が自然である。このすぐ前に、兼雅が任右大臣の挨拶を藤壺に対して申し入れるのに、宰相中将祐澄を介していることに注意したい。

同じような事が國讓下にもある。中宮権大夫が中宮の御消息を太政大臣忠雅に伝えようとして正頼邸に行つた時、藏人の少将近澄が取つて忠雅に渡す。忠雅は妻の六の君に逢いに米ている。この六の君始め大宮腹に姫君たちの集つてゐる場所に、近澄がいることは、同様に注意される。

新東宮が才一皇子に決定した才一報をもたらしして近澄が来るが、左大臣正頼と大宮とがこれを受け取る。正頼は「藤壺には告げたか」と言い、近澄は父の命で、藤壺のいる南の宮に行く。

## 宇津保物語登場人物論拾遺

少将はみなみの宮にまいりて見たまへば、わか宮をばひぎにすへたてまつりて、いま宮をばひぎにいだきたてまつり給<sup>ひ</sup>て、みかどのとしごろの御ちぎりをおぼしいでつゝおはするに、くら人のかみ「かうく<sup>る</sup>な<sup>ん</sup>」ときこえ給へば、女御のきみうちわらひて、(39ウウ) (一五八〇)

とある、文中の「くら人のかみ」は「くら人の頭」。「くら人の少将のきみ」の誤りと見る事も可能である。この場面での近澄とあて宮との応待は、同母兄妹であつてこそと思われる。

藏人の少将近澄を大い殿の上の腹とする記述は藤原の君の冒頭紹介における「十一郎ちかずみ」の上に冠する「おほいどの、御はら」という九文字だけである。しかもこの冒頭紹介は妙に物語全体から浮いてしまつてゐる点がある。特に十の君以下の姫君たち、八郎以下の男君たちの紹介が、物語の後半における実現との間に空隙があることは否定できない所である。臆測を加えるならば、この冒頭紹介は、長篇構成のための、手控えであり、ノートのようなものであつた。デッサンであつた。描線を何度も何度も修正しつゝ全篇の構想を進展せしめたのであらう。後篇を書き進めたのちに最後の修正を施して、冒頭の役目を完全にするつもりなのが、はたされな<sup>い</sup>ままに残つてしまつたのではあるまいか。いわば、この序段が結果として一番未完成な姿をとどめているのである。これを規準にして、実現された構成の細部まで律しようとする事に、近世以後の宇津保研究の方法論的な無理の一つがあつたのではなからうか。

## 四 雑考とところどころ

正頼の北の方の一人、大い殿の上は、冒頭の物語では「時の太政大臣のひとりむすめ」とある。物語の後半では、彼女が兼雅の姉であること、中宮および中宮の御匣殿、さらに兼雅のいもうとむつびの相手となつた一条の北の対の君と、すくなくとも三人の妹があつた事になる。彼女の年齢が全然示されないからわからないが、大宮の方<sup>に</sup>に五人の子が生まれたあとでやつと五郎あきずみを生んだという素描は、彼女の方を大宮すなわち嵯峨院の女一の宮より数年若く構想したものらしい。朱雀院の中宮は、その才一子たる東宮の年齢から推して、兼雅と接

近した年齢であろう。大い殿の上が結婚した時点でこの中宮はすでに生まれていた可能性の方が強い。後篇を書き継ぐ際、この「ひとりむすめ」という限定にはあまりかまっていなかったことになる。

兼雅のむすめである梨壺の御方は、すくなくとも国譲下の任女御の折には、女御にはなされなかつた。中宮が「いかでかなしつぽをばなし給はぬ」と抗議したが、新帝は「これは下臈にこそはあらめ、あひついでこそは」と言つて信念を貫いた。楼の上にもはつきり女御になつたとは語られていない。その下巻に、

右・大・殿のこ宮なしつぽの御かたひとゝころにとて、大きさいの宮にはかにわたり給はんとす。(37ウラ)  
(一八五九)

「こ宮」は小宮で三のみこ、大后は嵯峨院の大后である。ここにも「なしつぽの御かた」とあつて、「女御」とは書いていない。この人が女御になつたとしてもずつと後の事で、物語には書かれていない。物語系図等に、梨壺の女御と書くことは正しくない。

国譲下で新女御の中に式部卿の宮の姫君が入らなかつた事が書いてある。楼の上の下巻に、

女御は式部卿宮の御むすめをくはへて三人おはす。(48ウラ) (一八八二)

とあるのは、故式部卿の宮の姫君であつて、朱雀院の女御である。

さて、この朱雀院の女御であつた式部卿の宮の姫君については、国譲下に才七皇子の生母であると語られている。兼雅の夫人の一人である式部卿の宮の中の君の姉とあるから、当然大い君である。玉松の系図に「みこたちのことはみえず」とあるのは読みおとしである。また「七宮、御母大后宮のよし国譲巻にみゆ」とあるのも読み誤りである。問題は次の一節の読み如何にかかつている。

すづく院のみこたちは、きさいばらの二のみこは御やまひしてほうしになり給・てにし山におはす。大・殿  
ばらの四人、きさいばらの五人、さぶらひ給・七のみこは中の君のあね女御の御はら、それまいり給は

## 宇津保物語登場人物論拾遺

ず。九のみこはかういばら、わらはにてまいり給はず。(76オモテ) (一六五七)

「きさいばらの五人」は誤写がある。事実上不能である。一のみこは今上であり、二のみこは法師である。この場面において得るのは五のみこ一人しかない。「五人」が「五宮」を誤写したものとするか、女御腹の四人と、后腹の一人と合わせて五人と解し、上に脱文を想定するかしからない。七のみこは「中の君のあね女御の腹」というのでよくわかる。式部卿の宮の中の君をこれまでも単に「中の君」とだけ書いて来ている。「大殿ばら」は左大臣正頼の息女仁寿殿の女御腹の意で、三・四・六・八の四人がこの場面に候うていることは疑問がない。嵯峨院の花の宴の場面で、男みこだけが候うているのに不思議はない。さて、「七のみこ」以下、有朋堂文庫では、

七の御子、中の君のあね、女御の御腹、

と句読しているが注なし、日本古典文学大系では、「のあね」を傍注の混入として削り、

七の御子、中の君、女御の御腹、

とし、「中の君」を「女二の宮を指すのであろう」と注してあるが、「二の宮」を「中の君」と呼ぶことはあるべくもない。また「仁寿殿腹の七宮と中君はおいでにならない」と解釈してあるのも肯定しにくい。玉松は「七のみこ」を上につけて后腹と解したらしいが、上の文は切れていて続けられない。「中の君」が、蔵開以下に一つの話題を提供しつづけた故式部卿の宮の息女で女御であつたと解してみると、この一節は明快に解決する。

(注八)

拾遺と題してみたが、問題を残している人物関係は、まだまだ多い。拾遺のまた拾遺を幾篇かさらに必要とするようである。説明の拙劣から、紛糾した関係をますますごたごたさせたいかと思う。おわび申し上げる。

注一、本稿で取りあげる問題で、すでに片桐洋一氏の「宇津保物語登場人物総覧」(宇津保物語新攷所収)において解決されているものも少なくない。参照して頂きたい。

注二、北の対の君の存在は、片桐氏の「綜覧」にも触れていない。

注三、「綜覧」には、大い殿の上と兼雅との系譜には触れていない。

注四、歌の「いもせがは」の意味する所には、平安朝の歌の用例では、「いもうとと呼びせうと呼びあう間がら」「はらからの間の愛情」をたとえる意もあるらしい。後撰和歌集に見える「いもせの山」が二例ともきようだい同志の恋を歌っているのは大いに注意すべきである。

はらからどちいかなることか侍りけん

君と我いもせの山も秋くれば色かはりぬる物にぞありける（秋下）

はらからの中にいかなる事かありけんつねならぬさまに見え侍りければ  
むつまじきいもせの山の中にさへへだつる雲のはれずもあるかな

注五、拙稿、宇津保物語と遊仙窟（宇津保物語新攷所収）参照。

注六、注四を参照。この稿では断定を避けたが、まちがいないことである。

注七、もちろん断定は不可能。むしろ片桐氏の「綜覧」のまえがきが真実に近いかも知れない。後に出て来る人物から逆に推して人数が計算され、次の序列の紹介と各個の身上の紹介とは、別の次元ではめこまれたか。後の物語の中には、十一郎だの十郎だのは全く書かれていないのだから、冒頭紹介が小細工をして誤つたのではなからうか。とすれば、物語の内部では二十六人、冒頭紹介の中の各個の紹介でよい人間を一人作つてしまつた。だが書き入れるすべがなくて空白のままにしたか。片桐説の条理を採つて右のように考えたらどうかと思う。「綜覧」参照。

注八、片桐氏の前記「綜覧」にはすでに正しく処理されている。